

畜産総合研究センター

平成23年度機関評価結果報告

平成23年度 畜産総合研究センター機関評価調書（兼）評価票

畜産総合研究センター センター長 花澤信幸

評価委員会 評価項目	説 明	所見・指摘事項
1. 試験研究機関 の使命・役割及び それへの対応	<p>(1) 使命と役割</p> <p>本県の畜産は、21年度産出額では全国6位であり、本県農業の1/4を占めています。その内訳を見ると、肉用牛は5%と少ないですが、乳用牛が26%、豚33%、鶏卵35%と畜種別に非常にバランスがとれており、首都圏への畜産物供給の重要な位置を占め、どれも重要な部門と考えています。</p> <p>当センターの使命については、千葉県組織規定の中では、「畜産総合研究センターは、畜産業の振興に寄与するため、畜産に係る試験研究及び調査に関する事務をつかさどる。」とされています。</p> <p>また、試験研究の遂行に当たっては、農林水産部内の各課及び試験研究機関が連携して作成した「千葉県農林水産業試験研究推進方針」に基づき実施していますが、その中で「本県の農林水産業における試験研究機関の使命は、多様なニーズを踏まえ、県民の豊かな生活の実現に貢献できるよう、技術開発の面から支援することである。そのためには農林水産業における生産力を強化し、産業活動を環境に調和させつつ、農林水産などの資源を適切に活用することにより、担い手の経営安定と夢を持った取組の実現を目指し、消費者の求める安全・安心で質の高い食料を安定して供給するための研究・開発を推進することにある。」としています。</p> <p>当センターの具体的な役割としては、実際に農家で役に立つ実用的な試験研究を行い、畜産経営の安定・発展に資する家畜の改良、技術開発等を行うとともに畜産行政施策を支援する技術の開発・確立を行うことと考えています。以前はごく基礎的な研究課題も行っていましたが、予算、人員が厳しい現在では、実用的技術の開発に重点を置いています。</p>	<p>(1) 使命・役割について (指摘事項)</p> <p>①使命は、千葉県農林水産業試験研究推進方針に沿い、明確になっており、永年にわたり当該研究機関が県の畜産に関し幅広く研究技術開発を行い畜産の発展に寄与してきたことは高く評価できる。しかし、実用開発が主体で、農家に役立つことを主眼としており、「千葉ブランドの確立」を中心に一層の差別化のためには、積極的な外部機関の活用、共同研究を含めて基礎研究についての充実を検討すること。</p> <p>②飼料に関する取組みは、米の効率的利用や自給飼料の生産拡大等積極的に実施しているが、飼料に関する課題や解決策等、系統立てて全体として鳥瞰し、整理すること。</p>

評価委員会 評価項目	説明	所見・指摘事項
	<p>基礎的な研究は、将来の実用的技術開発につながるものとして単独の課題として取り組むこともあります。多くは技術開発の課題の中で取り組んでいます。</p> <p>(2) 活動の重点化</p> <p>重点的な活動のひとつとして、「家畜の改良」の取り組みがあります。県の総合計画の農林水産業部門別計画である「畜産振興計画」では、家畜の個体能力の改良の必要性について記載してあります。畜産経営にとって能力の高い家畜を飼養することは、生産コスト低減につながりますが、そのためには、優秀な種畜や精液、受精卵の導入と農場内での選抜が必要です。当センターでは、それらの対応として、豚では、系統造成^{*1}試験により優秀な種豚を作出するとともに人工授精技術の改良にも取り組んでおり、乳牛や肉牛では能力の高い後継牛の効率的な確保のために受精卵移植技術の改善に取り組んでいます。また選抜に用いられる牛群検定情報^{*2}の高度利用法の確立についても取り組んでいます。なお、乳牛の改良については嶺岡乳牛研究所が中心となって行っています。採卵鶏については、各々の経営にあった銘柄を選定できるような情報の提供のための銘柄比較試験を実施しています。</p> <p>重点的な活動の二つめとして、畜産経営の安定のための「飼料費の軽減」や「生産性向上」の取り組みがあります。</p> <p>飼料価格の高騰が続く、畜産経営では、その経費の半分以上を飼料費が占めているのが現状であり、飼料費の軽減や生産性の向上は経営の安定に直結し、農家が切望していることです。それらの対応としては、安価な低・未利用資源の検索、有効利用法について取り組んでいます。また、繁殖技術や飼養技術の改善による生産性向上については、農家、普及、行政からの要望に対応する形と、独法等の試験研究機関での基礎的研究を実用化して農家で利用しやすくする形の両面から取り組んでいます。</p>	<p>(2) 活動の重点化について (指摘事項)</p> <p>①重点的な活動のひとつ、家畜の改良の中で、特に乳牛、肉牛については、昨年の「家畜改良増殖目標」の改定を踏まえ、家畜改良事業団などとの情報交換を密にし臨むこと。</p> <p>②自給飼料の生産については、国の目標に比べやや立ち遅れがみられる。関係部局と連携し未利用地の利用拡大などにも一層の取り組みを行うこと。</p> <p>(所見)</p> <p>③研究活動における重点化については、家畜の改良、畜産経営安定のための取り組み、飼料用米の取り組み、畜産行政施策への支援の4つを挙げて展開しており充実している。</p>

評価委員会 評価項目	説 明	所見・指摘事項
	<p>重点的な活動の三つめとして、「飼料用米^{※3}」の取り組みがあります。</p> <p>今、農業施策の大きなものとして、戸別所得補償制度の導入があり、その中で新規需要米としての飼料用米の推進が大きな課題となっていますが、農林総合研究センターとの共同プロジェクト研究等で、畜産農家における飼料用米の利用技術の確立に取り組むとともに、飼料用米を用いた特徴ある畜産物の生産にも取り組んでいます。</p> <p>重点的な活動の四つめとして、「自給率の向上」と「環境調和型畜産」の取り組みがあります。</p> <p>畜産行政施策への支援としては、「畜産振興計画」で示されている推進方向及び対策に貢献できる多くの課題に取り組んでいます。特に自給飼料^{※4}の生産拡大による飼料自給率の向上や家畜排せつ物の適正管理と有効利用については、畜産課と連携しながら技術開発はもとよりその普及推進に取り組んでいます。また、市原乳牛研究所では農家から預託された育成牛を管理しており、集団育成牛の繁殖管理技術の確立を目指しながら、農家でも利用できる放牧地並びに草地管理技術の確立に取り組んでいます。</p> <p>なお、試験研究課題の設定については、農林水産部内関係各課及び普及機関による内部評価を受けることにより、その必要性や県の施策との関係等について明確にしています。</p> <p>※1 系統造成：遺伝的に似通ったバラツキのない、相互に一定以上の血縁関係を持った能力的に優れた豚集団（系統豚）を作ること。</p> <p>※2 牛群検定情報：牛群検定参加農家における毎月の乳牛各個体の乳量、乳質、繁殖成績などのデータを、家畜改良事業団が整理し、参加農家へフィードバックする情報。</p> <p>※3 飼料用米：水稻の粳または玄米を家畜の飼料に供する場合の呼称。</p> <p>※4 自給飼料：トウモロコシや牧草等を、農家が自ら（或いは委託等により）栽培・収穫調製した飼料のこと。</p>	<p>④研究への取組み全体について見ると、地味ではあるが現場で大いに努力しており予算が限られた中で奮闘している姿は良い評価に値する。</p> <p>⑤福島原発に伴う対応として放射線物質のモニタリング検査に関しては、国の指針が不明確の中、例えば、粗飼料の牧草について一早く調査をしており、今後の牛検査を初めとして県全域に対しさらなる検査・指導を推進して欲しい。</p>

評価委員会 評価項目	説 明	所見・指摘事項
2. 研究遂行に係 る環境	<p>(1) 組織運営における課題及び解決策 もっとも大きな課題としては、研究費及び研究人員が削減されていることです。そのため、研究の重点化による課題数の絞り込みを行ったり、他県の試験研究機関等との共同研究を実施し、一場所当たりの試験規模の縮小による試験の効率化及び全体の供試頭数の増加による試験精度の向上を図りつつ、外部資金の積極的な獲得を目指しています。</p> <p>(2) 研究課題選定方法 県内関係機関に試験研究機関に要望する研究課題を照会し、検討により課題化の必要性が認められたもの、試験研究成果発表会や講習会等で直接農家から要望のあったもの、また研究員が他の基礎的研究成果を参考にして実用化を図りたいもの等を新規課題候補として提出し、機関内評価委員会で検討します。選定では、評価の視点に基づき、試験設計が適正で成果が期待できること、農家への成果の普及が見込まれること、行政施策に合致していること等が検討されます。外部資金の獲得が見込まれる共同研究については、特に県内農家への成果の普及性が重視されます。なお、採択については要望課題が優先されます。</p>	<p>(1) 組織運営における課題及び解決策について (指摘事項) ①予算が縮減される中、予算構成は生産物、家畜の収入が多くを占めており、一般財源が少ないが、県の予算と外部資金を増やすこと。</p> <p>(2) 研究課題選定方法について (指摘事項) ①農家や関係機関の要望をベースに機関内評価委員会にて評価の視点を決めそれに基づき実施しているのは良いが、より差別化と特徴を強く打ち出すためには、潜在ニーズの掘起しの観点からテーマの捉え方を検討すること。</p> <p>(所見) ②施設の老朽化によって、現在の畜産の現場を踏まえた諸課題に対応できない点が数多くあると思われる。</p>

評価委員会 評価項目	説明	所見・指摘事項
	<p>(3) 研究活動のプロセスマネジメント 畜産では、一回の試験期間が長期にわたることが多く、その場合は試験設計の途中変更というのは困難です。そこで最初の試験設計の検討が非常に重要になりますので、機関内評価委員会で試験設計について十分に検討を行います。試験の進捗状況のチェックについては、室会議等により随時室長等が行っています。特別なチェックシートは用いずに対話により行っています。また、市原乳牛研究所と嶺岡乳牛研究所では、技術員を含めたミーティングを毎朝実施しており、試験の進捗状況についても随時検討しています。さらに、年度末に機関内評価委員会により研究課題の進捗状況の確認と計画の修正の必要性について検討するとともに、終了課題については、その成果、普及性、残された問題点をどうするか等について検討します。</p> <p>(4) 研究遂行のために必要な所管部局・外部との連携 研究を効率的に推進するため、下記のような連携を図っています。 ア プロジェクト研究等推進のための県内研究機関との連携 イ 現地実証試験や経営分野の調査研究のための普及部門との連携 ウ 試験の効率化や外部資金獲得のための(独)農業・食品産業技術総合研究機構や他県の研究機関との連携</p> <p>(5) 人員配置(人材育成を含む) 当センターの人員配置は、本所(八街)の総務課、企画経営室、環境飼料研究室、乳牛肉牛研究室、養豚養鶏研究室で75名、市原乳牛研究所で17名、嶺岡乳牛研究所で26名の合計118名であり、研究職が42名、技術職が69名、事務職が7名であります。19年度に比べて、研究職で5名、技術職で7名の減となっています。研究職の減員は、室や部の</p>	<p>(3) プロセスマネジメントについて(指摘事項) ①機関内評価委員会に対する報告を中心に実施しているが、現組織で、途中における研究活動の問題の早期発見、OJT、研究者のモチベーション、上司とのコミュニケーション、期日管理等につき、総合的かつ効率的な研究活動をすることが必要であり、そのための書式も明確にしたうえで実施すること。</p> <p>(4) 外部との連携について(指摘事項) ①所管部局との連携は図られているが、外部研究機関の一層の積極的活用に取り組むこと。</p> <p>(5) 人材育成について(指摘事項) ①OFF J T教育は、外部研修を中心に行われているが、OJTについては上記のプロセスマネジメントとの関連も考慮</p>

評価委員会 評価項目	説明	所見・指摘事項
	<p>統合及び兼務による室長、部長の減であり、研究員の数は維持されています。しかし、現在の室長、主幹はいままでの2研究室分を1人で担当しており、その分の仕事の一部を主席研究員がカバーしなければならない状況や技術職員の減についても研究員がカバーする状況にあり、確実に各々の負担が増えています。</p> <p>人員配置については、その研究員の経験、適性を考慮しつつ行っています。しかし、職員の削減により個々の仕事量は増加し、年齢構成の偏りにより分析・解析技術等の継承が難しい状況になっています。定期的に新規採用職員の配置があり在籍期間も長かった頃は、基本的な分析技術等を先輩研究員から継承し、中期研修等により最新技術を学ぶとともにスキルアップを図り、実験計画や統計的解析の知識を短期研修等により高度化させ、セミナー等への参加によりさまざまな情報を得るとともに研究的思考についても深化させることにより研究員としての成長を図ってきました。</p> <p>人材育成としては、スキルを高めることと研究的思考の深化が重要と考えますが、その点でも独法等の研究機関への中期研修が有効と考えます。しかし、受け入れ体制、旅費等の予算、研修中の担当研究課題の遅延等の問題がありますので、計画的に行う必要があります。また、「千葉県農林水産業試験研究推進方針」の中にも記述がありますように、長期的視点に立ったスキルの高い人材の計画的な育成・配置の推進についても具体的に検討していかなければならないと考えています。</p> <p>なお、ここ2年間で新規採用の研究員が複数入ったこともあり、若手を中心とした勉強会が立ち上げられました。勤務時間外の活動ですが、管理職員も講師等として協力をしています。</p>	<p>し、計画的に実施すること。</p> <p>②研究活動の将来の方向性や目標に向けて、個人ごとの中長期育成計画を策定することも検討すること。</p>

評価委員会 評価項目	説 明	所見・指摘事項
	<p>(6) 予算 試験に家畜を用いることから、全体の予算規模は大きくなりますが、生産物や家畜の売り払いによる財産収入で多くをまかなっており、県費の研究事業への歳出はそれほど多くはありません。全体の研究計画に見合った家畜の飼養計画を立て、予測される財産収入額から県費の歳出分を計算し、その額の過不足により飼養計画を見直す必要があり、予算の組み立てはやや複雑です。</p> <p>(7) 施設整備状況 分析機器や作業機械等の老朽化については、修理等に対応しながら重要性、緊急性の高いものから順次予算要求を行い更新を図っています。畜舎については修繕に対応するしかないのが現状です。</p>	<p>(6) 予算について (所見) ①予算の中で、生産物や家畜の売り払いによる収入が多いが、結果として収入が増えるのは良いと思うが、それを目的化することのないよう配慮していただきたい。</p>

評価委員会 評価項目	説明	所見・指摘事項
3. 研究成果	<p>(1) 中ヨークシャー種による地域特産豚肉生産技術の確立</p> <p>中ヨークシャー種^{※1}では、筋肉内脂肪含量を高める飼料中のリジン^{※2}濃度は 0.4%が望ましいことが確認され、カンショの飼料利用による地域特産豚肉の生産を考えた場合、カンショの配合割合は 10%以上配合することが肉質を向上させるには望ましいことを明らかにしました。本成果は、第 90 回日本養豚学会等で発表しました。</p> <p>研究成果を活かし、県産規格外カンショを配合した肥育後期飼料を給与した中ヨークシャー種の豚肉を「ダイヤモンドポーク」として銘柄化しました。「ダイヤモンドポーク」は、年間出荷頭数が 1,000 頭程度ですが、県内のトップブランドとして位置づけられ、他の県内ブランド豚肉とともに、「旨さが多彩 チバザポーク」のキャッチコピーのもとでピーアール活動に利用され、畜産課の主要施策である千葉県産豚肉の知名度向上に多大な貢献をしています。</p> <p>※1 中ヨークシャー種：英国ヨークシャー地方原産の中型白色豚で肉質の優れた品種。わが国では 1960 年代ごろまで全飼養頭数の 90%を占めていましたが、生産性が高い大型品種が主流を占めるようになり、現在は希少品種となっています。</p> <p>※2 リジン：タンパク質を構成するアミノ酸のうちで、栄養学的に不可欠なアミノ酸の一つ。</p> <p>(2) 効果的サルモネラ (SE) 防除法の検討</p> <p>SE ワクチンの有効性や接種による生産性に及ぼす影響などを詳細に亘り研究し、有効なワクチンの大すう期における適正使用法を確立しました。しかし、SE の完全防除はワクチンだけでは不可能なため、鶏舎の清掃・消毒、ヒトの出入り制限、ネズミの駆除など日常の衛生管理の徹底も重要であることも明らかにしました。</p>	<p>(1) 研究成果のPR・把握について (指摘事項)</p> <p>①家畜の品種改良や飼料の給与技術改善等多くの成果が出されているが、消費者へのアピールが弱いと思われる。県民向けの知名度向上や県のホームページを見ない人に対しても情報発信の方法に一層の工夫を行うこと。</p> <p>②研究成果の効果として、例えば、生産量の増加、農家の収益、品質向上等、出来るだけ定量的に把握し、かつ公表すること。</p> <p>(所見)</p> <p>③基礎的な研究を踏まえブランド豚肉生産技術を開発したことは高く評価できる。材料入手の確保に努め、製品供給の拡大を図ることが望まれる。</p> <p>④ワクチン接種を主とした SE の防除技術を開発したことは高く評価できる。成果の発表も多数行われ、防除メカニズム</p>

評価委員会 評価項目	説明	所見・指摘事項
	<p>本成果は、第138回日本獣医学会他で報告するとともに、千葉県畜産総合研究センター研究報告第7号、その他多くの報告書で発表しました。</p> <p>この成果の普及によりワクチン接種率が1.6倍に高まるとともに、農場の汚染度にあった使用方法により、生産性の低下を防止でき、経営改善につながりました。</p> <p>(3) 飼料イネサイレージの長期にわたる発酵品質改善とかび抑制のための調製技術 コンバイン型専用収穫機による飼料イネ^{※1}ロールバール^{※2}サイレージ^{※3}の長期貯蔵のためには、梱包密度を高く調製したうえで、乳酸菌添加が発酵品質の改善、尿素添加がかび発生抑制に効果的であることを明らかにしました。また、ラップフィルム^{※4}は6層巻き以上、1年以上の貯蔵では8層巻き以上が必要であることを明らかにしました。本成果は千葉県畜産総合研究センター研究報告第8号として発表するとともに、平成20年度試験研究成果発表会で報告しました。</p> <p>この成果の普及により、飼料イネロールバールサイレージの添加剤の効果的な利用方法が周知され、全体的な品質向上につながるとともに利用畜産農家の拡大にもつながりました。その結果、飼料イネの作付面積は平成20年103ha、21年150ha、22年230haと年々拡大しています。</p> <p>※1 飼料イネ：水稻の籾と茎葉をまとめて家畜の飼料に供する場合の呼称。なお、飼料イネロールバールサイレージは稲発酵粗飼料やイネホールクロップサイレージ（イネWCS）とも呼ばれる。</p> <p>※2 ロールバール：機械によって、材料草を円筒形状に圧縮・梱包したもの。</p> <p>※3 サイレージ：材料草を容器（サイロ）に入れたり、ロールバールにした後で空気を遮断し密封することにより乳酸発酵させたもの。</p>	<p>の解明に役立つものとなっている。他県での普及にも寄与すると思われる。</p> <p>⑤乳酸菌添加、尿素添加などにより飼料イネサイレージの効果的な長期貯蔵ができる技術を開発したことは評価できる。</p> <p>⑥ブランドの構築や農家との連携など、優れた点が多々あるため、それらをさらに積極的にアピールしてもいいのではないかと。また、所管部局との連携関係も良好であり、当該研究機関内で解決できない課題をどのような連携で解決に導いているか、という視点は、他の試験研究機関にとっても大いに参考になるのではないかと。</p>

評価委員会 評価項目	説 明	所見・指摘事項
	※4 ラップフィルム：ロールペールを密封するために用いるもので、このフィルムを巻きつけることにより空気を遮断する。	

評価委員会 評価項目	説 明	所見・指摘事項
4. 研究開発以外の 業務	<p>(1) 研究開発以外の業務として、</p> <p>ア 種畜・種禽、精液・受精卵の配布等による家畜の改良</p> <p>イ 乳牛の受託育成、飼料分析及び受精卵の性別判別や移植等の技術提供・支援</p> <p>ウ 試験研究成果普及のためのフォローアップ事業</p> <p>エ 農業事務所（旧農林振興センター）等との協力によるコンサルテーション・現地指導・技術普及</p> <p>オ 講習会・研修会による、技術者・生産者の養成</p> <p>カ 農業高校等の学校行事に対する積極的な協力による後継者の育成</p> <p>キ 各種共進会、共励会等の審査</p> <p>ク 小中学校の社会科学習、サイエンススクール等での啓発活動 などに取り組んでいます。</p> <p>この中で、平成 21 年度の種畜・種禽、精液・受精卵の配布実績は以下のとおりで、県内の家畜改良に貢献しました。</p> <p>ケ 種豚 103 頭</p> <p>コ 豚精液 1,118 頭分</p> <p>サ 初生ひな 1,173 羽</p> <p>シ 牛凍結精液 876 本</p> <p>ス 牛受精卵配布数 163 個</p> <p>また、現地指導としては、受精卵技術関係で延べ 67 回、放牧技術関係で延べ 7 回、畜産コンサルタント事業関係で延べ 10 回の技術指導を行いました。</p> <p>試験研究成果の普及啓発に関しては、フォローアップ事業も含めて各種講習会等への講師としての参加、試験研究成果発表会の開催等を行うとともに、畜産総合研究センターホームページによる情報発信を行いました。ホームページでは、これまでの研究報告の</p>	<p>(1) 家畜の改良、技術提供等の効果把握及びPRについて (指摘事項)</p> <p>①家畜の改良、技術提供・支援、講習会、現地指導等、幅広く活動しているが、それらの効果把握と外部への公表をより積極的に実施すること。</p>

評価委員会 評価項目	説 明	所見・指摘事項
	<p>掲載、主要成果の掲載に加えて、試験研究成果発表会の報告概要、内部評価の公表も行いました。</p> <p>なお、研究をサポートする立場として企画担当が2名（研究職員）おり、企画管理部門として課題の進行管理、評価、内部の総合調整、外部機関との連携等を行うとともに、情報収集とセンター内への周知並びに外部への情報発信の窓口として活動しており、そのひとつとして、ホームページの更新・管理を行っています。</p>	

評価委員会 評価項目	説明	所見・指摘事項
5. 今後の研究の方向性	<p>(1) 今後の研究の方向性について</p> <p>農林水産部では、現行の「推進方針」が平成 22 年度に最終年度を迎えることから、これまでの試験研究成果を検証・評価しつつ、担い手の減少・高齢化の進展や農林水産物価格の低迷など、本県農林水産業を取り巻く環境の厳しさを新たな背景とし、更に県の総合計画の基本目標のひとつである「経済の活性化と交流基盤の整備」を実現するために推進する施策項目の「光り輝く千葉の魅力発信」、「農林水産業の生産力強化と担い手づくりの推進」、「緑豊かで活力ある農山漁村づくりの推進」に貢献するために平成 23 年度からの 5 か年間で取り組むべき新たな「千葉県農林水産業試験研究推進方針」を 23 年 1 月に策定しました。これにより、本県農林水産業の課題や施策の方向性を踏まえて、効率的かつ効果的な試験研究の推進と成果の迅速な普及を図ります。</p> <p>推進方針に掲げられた基本目標に応じた当センターの研究の方向性は以下のとおりですが、特に重点を置いているものは、アとエになります。</p> <p>ア 生産力を強化し農林水産物を安定供給する研究</p> <p>生産力を強化するため、飼料自給力の向上、乳牛の生涯生産性の向上、繁殖性向上、粗飼料の多収技術などを推進します。また、安定供給を支えるため、自給粗飼料の効率的貯蔵・利用技術、家畜の育種改良、受精卵移植技術の改善などを推進します。</p> <p>生産力に関することは農家の経営に直接的に影響をおよぼしますので、当センターとしては、今まで最も重点を置いていた分野で、今後も中心となるところです。</p> <p>ここでの主な研究は、新規課題としては高泌乳牛の繁殖性改善を目指したあらたな飼養管理方法の開発があり、継続課題としては効率的な豚精子の保存・注入技術の開発、自給飼料を活用した発酵 TMR（混合飼料）の調製・利用技術の開発や豚の系統造成並びに鶏外部寄生虫の防除技術の確立等があります。</p>	<p>(1) 今後の研究の方向性について (指摘事項)</p> <p>①千葉県農林水産業試験研究推進方針に掲げている基本方針に基づく 5 つの方向性は明示されているが、これらと関連する研究開発の中長期戦略を策定すること。</p> <p>②バイオマスの有効利用、リサイクルの推進については、県の他の研究機関との共同化や県全体の排泄物の有効活用の検討が必要である。また浄化処理については、各分野で様々な研究や実用化がなされており、幅広く情報収集をしたうえで取り組むこと。</p> <p>③ブランド化の推進においては、革新的技術の活用を掲げているが、具体性が乏しいため、今後、ターゲットを明確にし、具体的に検討すること。</p>

評価委員会 評価項目	説 明	所見・指摘事項
	<p>イ 環境に調和した農林水産業を推進する研究 環境保全型畜産を基本として、環境負荷低減化、排せつ物の適正処理技術に取り組むほか、バイオマスなどの有効利用の観点から排せつ物の有効利用技術に取り組むとともに有機性資源のリサイクルを推進します。ここでの主な研究は、新規課題としては放流の時に問題となりやすい浄化処理水の色を低コストに脱色する技術の開発があり、継続課題としては中小家畜における低・未利用資源の有効活用、家畜排せつ物のセメント製造等への燃料利用技術の開発等があります。</p> <p>ウ 農林水産資源の維持増大と多面的機能を保全する研究 資源の持続的利用として、当センターで系統造成した種豚の効率的な利用技術の確立を目指すほか、多面的機能の維持増進として家畜の放牧管理法の確立を目指します。ここでの主な研究としては、造成した系統豚と交配するのに相性の良い系統豚の検索や耕作放棄地の簡易草地造成技術の確立等があります。</p> <p>エ 革新的技術を活用し多様なニーズに対応したブランド化を推進する研究 多様化したニーズに対応した技術のひとつとして飼料用米の取り組みを推進します。飼料用米については、水田施策との関係もありますが、ここでは、各畜種での飼料用米の基本的な利用技術から高付加価値畜産物の生産につながる飼料用米の利用法について取り組みます。</p> <p>オ 多様な担い手を支援し経営を強化する研究 地域活性化方策の構築に資するために飼料イネの推進につながる取り組みを行うとともに、新技術等の導入条件と定着要因の解明に取り組みます。ここでの主な研究は、新規</p>	<p>(所見)</p> <p>④生産力の強化が今後も中心になるのは妥当であるが、言うまでもなく、安全性の確保も重要であることに留意する必要がある。</p> <p>⑤畜産が環境に及ぼす影響については温暖化への寄与を含めて対応することが重要であり、県の他の機関との連携を密にして臨む必要がある。これに関しては、LCA（ライフサイクルアセスメント）手法による解析も検討してほしい。</p>

評価委員会 評価項目	説 明	所見・指摘事項
	<p>課題として飼料イネ専用品種の収穫時期別の収量性等の解明や酪農家がチーズ工房等の6次産業*を行う場合の経営条件の解明等があります。</p> <p>※6次産業：農業者が生産（1次）から加工（2次）販売（3次）まで行うこと。</p>	

評価委員会 評価項目	説明	所見・指摘事項
6. 前回評価での指摘事項への対応	<p>(1) フォローアップ機能の充実</p> <p>毎年度当初、フォローアップ委員会及びフォローアップ推進委員会を開催し、フォローアップ課題の選定、普及方法や普及状況の確認のみでなく、運営方法をも含めた問題点の抽出を行い、改善を図りました。具体的には、フォローアップ調書等の改善、現地農業事務所（旧農林振興センター）との連携方法の改善やフォローアップ終了時の事後評価の実施などを行ないました。</p> <p>なお、フォローアップ課題としては、養豚の人工授精に関するもの、牛群検定データの有効利用、交雑種去勢牛の飼料イネ利用による肥育技術、飼料イネの収穫調製技術、鶏の換羽*方法に関するものの5課題を行っており、うち2課題が終了しています。この2課題では、フォローアップの期間3年の間に、研修会や講習会を7回開催するとともに、延べ39戸について戸別指導を実施しています。</p> <p>※換羽：産卵鶏は65週齢程度になると産卵率と卵質の低下が起きるために、絶食等により産卵を一時的に中止させ卵巣等の組織をリフレッシュさせることを行うことがあります。この時に羽毛もはえ換わるためにこのことを換羽といいます。アニマルウェルフェアの観点から絶食によらない換羽方法の確立が求められています。</p> <p>(2) 企画管理部門の充実</p> <p>機関内評価委員会の機能強化及び具体的基準の作成については、評価の内容を具体的に示した「畜産総合研究センター機関内評価の視点」に基づき評価を実施し、研究課題の中止も含め重点化、整理を進めてきました。</p> <p>関係各課および農業事務所による内部評価体制を立ち上げ、新規課題の設定から課題終了後の成果の普及までの一連の過程の中に行政・普及関係機関の評価や意見の反映が行え</p>	<p>(1) フォローアップ機能の充実について</p> <p>(所見)</p> <p>①フォローアップ機能の充実については、フォローアップ委員会や推進委員会開催により改善が進んでいるが、本来は日常業務におけるフォローがベースであり、委員会は、その確認のための役割であると思われる。</p>

評価委員会 評価項目	説明	所見・指摘事項
	<p>るようにしました。</p> <p>また内部評価では、新規課題の設定における行政施策との関連性を明確にすることにより、県の試験研究機関としての役割・使命について研究員の意識統一を図るとともに、農家のみならず一般県民に向けてわかり易く説明する能力の向上も図っています。</p> <p>(3) 研究の深化</p> <p>研究者の中長期的配置については主務課とも連携して配慮しています。</p> <p>21年度より複数の新規採用職員の配置がありましたが、それまでは新規採用職員の配置はほとんどありませんでした。そのような中、人材育成方法としては、日常の業務の中での先輩研究員からの分析・解析手法等の継承を受けながら、独法や関係中央団体の主催するセミナーや講習会、講演会等への参加、或いは独法主催の一週間程度の短期研修への参加によりスキルアップを図っています。また、共同研究等を行っている研究室では、研究遂行及び検討の場において独法や他県の研究者との交流により資質向上が図られています。なお、独法主催の中期研修については当センターでも1名程度の研修旅費を確保していますが、研修が3カ月間におよぶためになかなか参加できませんでした。しかし、新規採用職員の配置もあり、22年度より1名ずつの参加を行っています。</p>	<p>(3) 研究の深化について (所見)</p> <p>①研究の深化については、対象と目標設定をはっきりさせるとともに、研究者の評価も重要になると考えられる。優れた研究業績、研究論文の質と数、内外からの評価、研究費獲得等により研究員を評価し、研究環境を良くする仕組みについても今後検討する必要がある。</p>